

# 玉露用新品種「ひめみどり」について

讃井 元\*・安間 舜\*

SANAI, H. and AMMA, S. On the New Variety of  
Tea Plant "HIMEMIDORI"

## 1. まえがき

福岡県八女地方は古くより玉露の産地として著名で、全国総生産量の38%を占めているが、その品質は戦前の名声を保持するに至つてない。このため県は品質の改善向上を第一義として奨励施策している。九州農業試験場では昭和25年農業試験研究機関整備総合に際し、福岡県の茶業振興に寄与すべく、茶樹育成研究室において玉露用品種の育成をとり上げてきた。幸い昭和35年3月玉露用品種として「ひめみどり」を茶農林23号として登録することができたので、その特性の概要を述べて普及奨励に供するものである。

## 2. 来歴および育成経過

福岡県農事試験場筑後分場において、昭和4~6年八女郡大淵村、笠原村の山間部の自生茶に由来する在来茶園から多数の茶樹を集め、昭和8~10年に選抜試験を行い、品質すぐれたNo.15を有望と認め、福15の系統名を附した。昭和25年九州農業試験場はこれを引継ぎ、特性能力を検定し、昭和28年第2次選抜樹に決定、昭和30年より適否試験に供試した結果、優良品種と認められたものである。

## 3. 特性の概要

樹姿は中間型、樹勢強く、葉形は並葉楕円形で小葉に属し、葉色は「やぶきた」より淡いが濃色、葉身はやや反転するが、縁辺屈曲・側脈角・側脈数、鋸歯数は「やぶきた」と大差はない。葉厚も「やぶきた」と同じ程度であるが、同化組織はやや厚い。耐寒性・耐病性強く、再生力はやや劣るが、黄化さし木法を行えば増殖は容易である。

摘採期は中生で5月5日、「やぶきた」のおおい下

栽培の場合より1~2日晩い程度で、節間やや短く、茶芽の大きさは小さい方である。

収葉量は10アール当り240~300kgで中位と見なされる。しかし従来の玉露用品種に比べれば格段に勝り、「きょうみどり」・「さみどり」の倍近く、初期生育もすぐれている。

茶の品質は玉露としてきわめて優秀で、形状は小型で締りよく、色沢は濃緑色で光沢あり、水色は淡黄緑色、滋味は濃厚で香気とともに八女茶特有の風味がある。

## 4. 栽培上の問題点

再生力(さし木発根)がやや劣るので、苗木の増殖は黄化さし木法によらねばならない。黄化処理の時期は4月新葉2~3枚開きとし、むしろあるいは黒色ビニールまたは稲わら等で、摘採面上30~50cmの高さに被覆して2~3週間光線を遮断して黄化し、その後被覆を除き2~3週間光線にさらして緑化した枝条をさし穂に用い、さらにさし木の際にNAA 0.02%水溶液(1昼夜)を処理すれば、さし木9ヶ月で健苗が得られる。なお黄化処理を行う採摘園には窒素質肥料を充分施すことが必要である。

生育・収葉量は従来の玉露用品種よりも著しく勝っているが、「やぶきた」のような普通煎茶用品種に比べるとやや劣る。従つて特に健苗を養成し、定植後も肥培を充分にして初期生育の促進に努めることが肝要である。

また品種を保持するためには夏茶の摘茶をおさえ、一番茶のみにすることが望ましい。

## 5. むすび

これまでの玉露用品種は生育劣り、生産力低く、福

\*九州農業試験場

岡山では八女茶の品質改善にとりあげ得る適当な品種が得られなかつた。「ひめみどり」は八女地方山間部の自生茶樹より選抜したもので、試作の結果も良好であつたので、福岡県において奨励品種に採用すること

になつた。従来普通煎茶用品種「やぶきた・ろくろ」等を玉露用に転用していたが、煎茶用品種は煎茶として用いるべきで、「ひめみどり」はこの意味において今後期待される面が多い。